

国語

主体的な読者を育み、多角的に読む力を高める指導の研究 - 記念館活動を通じた多様な読書活動やICTの活用による 協働的な学習の実現 -

茂原市立茂原小学校教諭（前同市立豊田小学校教諭） わたなべ ひろし
渡邊 紘志

文学の学習指導は、教師主導の教科書教材を中心とした心情読解にとどまり、児童にとって受動的な授業になりがちであった。これからは、読者が主体となり、自らの考えを多様な解釈に触れながら形成し、多角的に読む力を育成することが必要である。そこで、本研究では、複数の宮沢賢治作品を多様な読書活動を通して主体的に読み、多角的に解釈したことを展示物に表現することや異質性のある他者と協働的に学習するためにICTを活用することを組織した記念館活動の単元を開発した。この研究を通して、児童が主体的な読者となって考えを形成し、多角的に読む力を高める指導の知見を得た。今後、読む学習と読書を連動させた授業を公開したり、研修会等で研究報告をしたりして成果を還元する。

社会

公共性のある意見を見いだし、政治的有効性感覚を 高める社会科学習の在り方 - 八街市ふれあいバスを中心とした政治学習を通して -

佐倉市立青菅小学校教諭（前八街市立八街北小学校教諭） ごうだ あきお
合田 明生

日本はなぜ政治に参加する人が少ないのか疑問に感じ、研究を始めた。調べてみると政治に自分の考えを反映させられるという政治的有効性感覚が低いことが分かった。子供たちが大人になっても政治に関わり続けていくため、研究主題を設定した。

検証授業では、八街市ふれあいバスを題材とし年表や地図・関係図などを活用した。さらに、乗車をして利用者にインタビューを行った。学習を通して、ふれあいバスの課題があることを知り、問題解決として市長に6つの提案を行う政策決定に関わる学習を行った。

その結果、実際に3つ実現をしていただき、政治的有効性感覚を高めることができた。今後は、どの市でも置き換えることができる公共交通学習の政治単元を広めていきたい。

数学

統計的リテラシーにおける代表値を活用する力を 育成するための授業の一考察 - 既習内容と比較して振り返る場面の設定を通して -

木更津市立木更津第三中学校教諭（前同市立太田中学校教諭） のうじょう たかおみ
能城 貴臣

データの活用領域は、日常に近い素材を扱っており、社会でも役に立つ統計的に問題解決する力を身に付けることを目的としている。しかしながら、全国学力・学習状況調査では、他領域と比較して正答率が低い。本研究では、統計的に問題解決する力の素地になる代表値を活用する力を育成することを目標に取り組んだ。考察する時間を確保するための工夫や既習内容と比較する場面を設定した授業を検討し、単元構成を行った。成果として、適切な代表値を選択し、説明に活用できる生徒が増え、日常でも様々な数値に対して代表値に関心を示すようになった。今後は、批判的に考察できるようにさらに研究を重ねていくと共に、様々な場面で活用できるような実践力を身に付けさせたい。

音楽

資質・能力を育む創作の授業デザインの追求

-音楽的な見方・考え方を働かせ、実感を伴った理解過程に着目して-

船橋市立葛飾中学校教諭（前同市立宮本中学校教諭）^{じゅうくろき しずか} 重黒木 静

創作の学習は、子供が音楽に主体的・能動的に関わり、音楽を形づくっている要素とその働きに気付きながら音楽の構造についての理解を深め、感性や創造性を発揮して思考する学習であると捉えている。そこで、本研究では、研究の視点として、①感性を働かせることのできる音楽活動を工夫する②協働的な学びの充実を図る③個別最適な学びを保障する、を掲げ、検証した。その結果、一人一人が感性や創造性を発揮しながら思考し、音楽のよさや価値を見出す姿が見られた。今後は、創作の学習で育つ力が子供たちの音楽との関わりをより豊かにするものと期待し、実践の幅を広げながら、創作の授業デザインを追求し続けていきたいと考えている。

体育

児童の運動有能感を高めるマット運動の学習指導の検討

-協同学習モデル「PACER」を適用した授業実践を通して-

いすみ市立東小学校教諭（前同市立夷隅小学校教諭）^{たかなし たかひろ} 高梨 崇洋

体育科の課題として、長年、運動の二極化が問題となっている。そこで、児童の運動への内発的動機づけを強める運動有能感を高める必要があると考えた。第4学年を対象に、互いの成果を高め合うために協力して関わり合うことを意図した指導法である協同学習モデルPACERを適用したマット運動の授業実践を行った。その結果、本研究の学習内容及び手立てが児童の運動有能感を高めることにつながり、特に運動有能感の低い児童に大きな効果をもたらすことが明らかになった。さらに、運動領域、認知領域でも学習成果を得ることができた。今後は本研究で得た成果を広めていくと共に、他学年・他領域でも実践し、運動に親しむ児童を更に増やしていけるよう尽力していこうと考えている。

小学校外国語

自分で考え、伝え合う英語力を育てる Small Talk の指導

-相手意識をもって、主体的にコミュニケーションを図ることができる児童の育成-

一宮町立一宮小学校教諭（前茂原市立東郷小学校教諭）^{おおたわ えみ} 大多和 絵美

外国語科のやり取りの活動において、児童が型通りの短いやり取りで会話を終了してしまい、内容を思考したり、主体的に伝え合ったりすることができていないという課題があった。そこで、目的や場面、状況に応じて、自分で考え、伝え合う英語力を育成するため、小学校6年生の授業において、毎時間、授業の始めと終わりに Small Talk の活動を取り入れた。言語材料を繰り返し使用できるようにし、会話を続けるための基本的な表現を段階的に指導することで、児童が話す内容や使う英語表現を自分で考えて伝えたり、相手意識をもって、主体的にコミュニケーションを図ったりすることができるようになった。授業に帯活動として取り入れるなど、話す力の向上に向け、活用していただきたい。

総合的な学習の時間

持続可能な社会の創りに求められる資質・能力の育成 - 関連的な指導によるESDの構成概念の形成過程を通して -

柏市立柏第七小学校教諭（前松戸市立北部小学校教諭） ひらまつ まさひろ 平松 正裕

これまで総合的な学習の時間の実践を中心にESDに取り組んできた。しかし、ESDのカリキュラムの位置付けや教科横断的な視点に立った関連的な指導の在り方について課題が残った。そこで、持続可能な社会の創りに求められる資質・能力を育成するために、教科横断的な視点に立った教育課程を編成し、社会科と総合的な学習の時間を関連付けて資質・能力を育成する研究を行った。持続可能な社会づくりには、人と人の関わり、自然や地域など様々な関わりがある。この「関わり合う」ことを相互性という概念的な知識と捉え、児童に形成することができた。本研究は、教科横断的な指導の在り方についての一提案である。社会科と総合的な学習の時間を関連付けて指導する一助となれば幸いである。

学校人権教育

人権を尊重した児童生徒への接し方に関する一考察 - 教員の認知バイアスに着目して -

山武市立山武北小学校教諭（前同市立松尾小学校教諭） さとう まさひろ 佐藤 雅浩

学校現場では、教員が気付かないうちに、児童生徒の人権への配慮不足に陥っている場面がある。そこで、教員では気付きにくいのであれば、児童生徒の声に耳を傾けることが必要だと考えた。本研究では、大学生を中心に質問紙調査、面接調査を行い、小中学校時代に一人一人を大切にしていなかったと感じた教員の言動事例を収集した。また比較分析のために、一人一人を大切にしていたと感じた教員の言動事例も同様に収集した。その後、KJ法で教員の言動を類型化した。類型化したカテゴリーは、教員が言動を省察する際の視点として活用されることを期待する。そして収集した事例は、個人情報に修正、削除を加え事例集にまとめた。事例集は更なる改善を図り、地域の研究発表会等で還元していく。

現代的教育課題

学校・家庭・地域をつなぎ、児童の集団的 問題解決能力を育む社会教育の在り方 - 児童・保護者・地域、異集団での協働関係を築く学び合いを通して -

館山市立船形小学校教諭（前鋸南町立鋸南小学校教諭） おかだ よういち 岡田 庸一

時代の変化に伴って他者との関わりが減り、学年相応の社会経験・生活経験が不足している児童が増えている。そこで、児童の他者と協力・協働して問題解決する力を育成するため、6年生の総合的な学習の時間において、地域課題をテーマに地域の人との学び合いの場を設定した。地域の人との意見に触れることで、児童の不足している経験や知識が補われた。その結果、多面的な視点から課題を見だし、地域特性を考慮した客観的で自分事として捉えた課題の解決策を導き出すことができた。以上から、地域の人との学び合いの場の設定は、他者と協力・協働して問題解決する力の育成に有効であることが明らかになった。今後とも地域と関わり、学ぶカリキュラムを検討し、連携を促していきたい。

特別支援教育

視覚障害児の歩行指導に関する考察

- 幼児が主体的に歩くために -

ひらやま きょうこ
 県立千葉盲学校教諭 平山 恭子

本校は、視覚障害を有する幼稚部から理療科までの幼児児童生徒が通う学校であり、歩行訓練士による歩行指導は、小学部から自立活動の一環として行われている。視覚障害を有する幼児が、盲学校で白杖歩行の指導を受けている実践が全国にはなく、歩行訓練士が直接的に幼稚部で指導をする学校も少ない。そこで、幼児段階から、歩行訓練士の視点で実態把握を行い、白杖を活用した歩行指導の授業実践を行ったところ、主体的に歩く姿が見られた。生活全般において主体性に乏しい視覚障害と知的障害を有する幼児の歩行指導において、白杖等の移動補助具を活用する有効性が明らかになった。今後は、歩行訓練士として、幼児が楽しんで歩くことができるような指導・支援をしていきたい。

特別支援教育

特別支援学校におけるコミュニティ・スクールの在り方

- 持続可能な地域とのつながりを目指して -

おおぬき たつや
 県立飯高特別支援学校教諭 大貫 達也

本校では、令和元年度よりコミュニティ・スクールを導入している。今後持続的に地域とつながり、協働活動を充実させるために、先進校の取組や持続的なつながりに必要な要素を学び、本校の実践に生かしたいと考えた。本研究では、全国の特別支援学校に調査を実施し、地域の教育資源を活用した授業実践を行った。地域との協働活動では、生徒の自己有用感の高まりが見られ、持続的に地域とつながるためには、学校や地域の課題を教育活動に取り入れることやコミュニティ・スクール担当を中心に共通理解を図りながら進めることが重要な視点であることが分かった。研究で得た成果を、研修会等を開催し校内の教員の理解を深めるとともに、今後導入する学校へも情報を発信していきたいと考える。

企業等派遣

「チーム学校」と「働き方改革」の推進に向けた一考察

- 企業の内製化に学ぶ、業務改善の提案 -

かの きみひろ
 多古町立中村小学校教頭（前香取市立佐原小学校教諭） 鹿野 公敬

学校のみならず一般企業においても同様に業務改善が求められている。一般企業での研修及び学校を俯瞰することで、学校運営に生かせる取組を探った。公立学校共済組合千葉宿泊所ホテルポートプラザちばでの研修では、日々の変化に対応しながらも長期スパンで改善を試みるマネジメントと、従業員一人一人が目的を共有し活躍する現場を目の当たりにした。本研修で得た経験から、組織としての地道な取組の積み重ねが大きな変化を可能にすることを踏まえ、実践可能であろう具体的な取組を9点提案した。自らが実践するとともに、各校における改革の第一歩になることを期待する。また、組織を創るすべての教職員が、たゆまぬ研鑽のもと、人材として生き生きと活躍できる学校づくりに貢献したい。